

季報

二松学舎大学附属図書館 Quarterly Report

三島中洲郎

漢學塾二松学舎
二松学舎専門學校

跡

No.116 2023（令和5）年7月

P2 わたしと本 岩崎愛一

P3 夏の図書館にて 和久 希

P4～5 盛岡文学散歩 ～好摩・渋民地区編～

P6 どこからでも閲覧・複写ができる！
国立国会図書館「個人向けデジタル化資料送信サービス」

P7 本学所蔵資料紹介 / 作家のおやつ巡り⑥

P8 本学教職員著書紹介

わたしと本

国際政治経済学部国際経営学科 教授 岩崎 愛一

小さいころから本を手にすることがなかった。昭和30年代、子供向けのマンガ雑誌「少年マガジン」等でさえ読んだ記憶はない。文字が嫌いなのである。そのため上級生になるにつれ漢字を覚えることがはなはだ苦痛になった。中学で夏休みの感想文提出のために、仕方なく「ジョン万次郎漂流記」を読んだ記憶がある。それが唯一本と言える記憶にあるものである。普通、中学生が読む漱石や芥川なんて、頭の片隅にもなかった。本を開いたとすると、それは天体図鑑である。それも、天体写真を見ているだけで、文字としては写真の注釈を読むぐらいだ。高校生になり、本屋に足しげく通ったが、数学問題集を見て、解けそうもない問題を探す。さすがに大学受験が迫ると、世界史をはじめ、教科書の類を読むことになる。前青春時代と言われるこの時期に、青春ものの本をあまり読むことなく育ち、書ける漢字が小学生並になってしまった。皮肉にも、そんな私が二松学舎大学の教員になった。

本（文字）嫌いであった私が、大学に入るとがぜん本を読み漁るようになる。ただし、物理や数学である。初めて知る新しい物理理論や、その理解に必要な数学を読む。当時、大学の教科書は陳腐なため、面白そうな専門書を探していた。最新の物理学を知るために何冊も読むことになる。こうして初めて、大学1,2年時に購入した専門書が増えていった。しかし、それも大学3年までである。以降、大学院でも専門書、教科書の類を購入し、読むことはなくなった。専門知識は、図書室にある学術雑誌からコピーしたプリントだけである。今では、そのコピーも、ネットで得られるようになり、新しく購入する物理関連の本は年に1冊もない。研究室には、学生時代に購入した本が埃をかぶったダンボール箱に入ったまま放置されている。

しかし、高校時代に青春ものを読まなかったわけではない。漱石の「こころ」「門」や、太宰、芥川等を読んだ記憶がある。「門」にある「彼は門を通る人ではなかった。また門を通らないで済む人でもなかった。要するに、彼は門の下に立ち竦んで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であった。」という情景が今でも思い出される。前青春期の多感な時代に、開かない門、すなわち「絶望」ということを主題にした「門」になぜか慰められた。多くを読んだわけではないが漱石は好きな作家だった。

30歳を過ぎ、大学の職もなく、また国内での奨学金を得ることも難しくなり、初めてアメリカに渡った。1985年の1月である。いつ職を得て日本に帰れるかわからない中で、初めて見るアメリカの姿に戸惑い、こんなところで生きてゆけるのかと、不安であった。その時持参した本が江藤淳の「漱石とその時代」である。漱石のイギリス留学での苦悩がうまく書かれていた。異国の地にいる自分と重ねて何度も読んだ。

また、ある時ふと目にした茨城のり子の詩「根府川の家」がなぜか心に残った。作者が戦争時代に、東京へ向かう列車からの景色に青春期の心証を重ねた詩。

根府川
東海道の小駅
赤いカンナの咲いている駅
たっぶり栄養のある
大きな花の向うに
いつもまさおな海がひろがっていた 中略
溢れるような青春を
リュックにつめこみ
動員令をポケットに
ゆられていったこともある
燃えさかる東京をあとに
ネーブルの花の白かったふるさとへ
たどりつくときも
あなたは在った

丈高いカンナの花よ
おだやかな相模の海よ
沖に光る波のひとひら
ああそんなかがやきに似た
十代の歲月
風船のように消えた
無知で純粹で徒労だった歲月
うしなわれたたった一つの家賊箱 中略
女の年輪をましながら
ふたたび私は通過する
あれから八年
ひたすらに不敵なところを育て
海よ
あなたのように
あらぬ方を眺めながら……。

この詩を読んで、作者の家は根府川あたりにあるのかと思っていたが、違っていた。なぜ「根府川」なのか？熱海から東海道線に乗るとわかった。この辺りに来ると、突然この詩に描かれた見事な青い相模湾が広がるのである。

数式に囲まれる日々の中で、時折目にするこれらの「小説」「詩」は、青春時代はもちろん、今でも安らぎを与えてくれる。



夏の図書館にて

文学部中国文学科 専任講師 和久 希

その大学図書館の3階には、ふだん人が滅多に足を踏み入れない一角があった。かつて神学部があった名残で、そこには哲学、とりわけキリスト教関連の古典的名著が並び、おそらくは幾年かの長い時を経て、誰かの手にとられるのを待っていた。

私がそこを覗いたのは、夏休み直前のことだった。レポート執筆（記憶が正しければ『オイディプス王』についての課題だ）のための資料を手に入れて、飲み会の集合時間までの暇つぶしだった。窓の外は肌を灼くほどに眩しく、木々の緑はことさらに色濃くて、よく冷えた空調が外に出るのをためらわせた。そうでなければ、そこにとどまることなどあり得なかっただろう。そうして私は、未踏の無人エリアに潜入したのだった。

そこにあった書名はもう思い出せない。ただ、色あせた背表紙をひっぱり出すと、その中には見たこともない鮮やかな知性がひしめいていた。どのページを開いても、知らない帝国の知らない賢者たちが、なにか本質的なものについて語っていた。その論理の細部まではとても理解できなかったけれど、それらはいかにも魅力的に見えた。そして、もしかしたらここに書かれていることは、私がいつも漠然と思いつめがらせていることに接続しているかもしれない、と直感した。この賢者たちは、私に語りかけているのかもしれない、と。そんなふうに思えたのは、はじめてのことだった。

翌日は土曜日だった。またしても前日の酒が残っていた私は清涼飲料水を手にはしていたが、ふたたび同じ書架の前に立っていた。当時、ぎこちなく世界と向き合っていた私にとって、そこに行くことが必然のように感じられたからだ。なにかほんとうのものにふれたい、という願望は、まさしく人類が哲学（知性への希求）と呼んできたものにふさわしいだろう。しかも、開いたページに書かれていたのは、いつもの講義で聴くような定式化された真理ではなく、はるかに生々しい思考、そしてその果てにたどりついた剥き出しの真実だった。そのスリルに圧倒されながら、私は夢中になってページをめくり、ノートをつけた。とくに偽ディオニュシオス、エリウゲナらの高度に抽象的な議論に興味を覚えた。彼らの形而上学的思索は、もしくはその哲学的着想は、あるいは私の一部として組み込まれているところがあるかもしれない。——私としてはそれくらい

に没頭したのであった。また、ベッサリオン（新しくできたワイン・バルではなく、ローマ教会の枢機卿の名前だ）のような、文化交流に関わる人物にも大きな魅力を感じた。ただ同時に見えてきたのは、いみじくもホワイトヘッドが「ヨーロッパの哲学伝統の最も安全な一般的性格づけは、それがプラトンについての一連の脚注からなっているということである」（『過程と実在』1929年）と指摘したように、哲学の源泉としてのプラトン、その巨大な影であった。結局、その夏のうちに、広範に及ぶプラトン哲学の全貌までもも視野に収めることはかなわなかったが、それでも哲学に明け暮れたひと夏の経験は、私にとっての原風景として今も鮮明なままである。

ひるがえって、現在の私たちの周囲は、さまざまなデバイスで溢れている。そこではまるで私たちさえもが一つの端末であるかのように、情報が身体をめまぐるしく通り抜けていく。実際に一冊の書籍を購入するにしても、新刊情報で見かけたキーワードを入力すれば、大手通販サイトがその日のうちに発送してくれる。そのような文明的日々を享受しながら、しかし一方でふと、見知らぬ背表紙の並んだ棚から一冊を選びとる機会がなくなったことに思い至る。それはたしかに便利であるには違いないが、あの夏、私が出逢ったものは、もうやってこないだろう。そう考えるといささか残念でならない。あの体験があったからこそ、私は哲学の道に進んだのだ。

この夏、本学の附属図書館をあてもなくブラウジングしてみようと思う。もうすぐまた、夏休みがやってくる。





盛岡文学散歩 ～好摩・渋民地区編～



今年1月、米紙ニューヨーク・タイムズは、「大正時代の和洋折衷の建築物や伝統的な旅館、川が流れる自然が満ちており、とても歩きやすい」との理由により、「2023年に行くべき52カ所」の2番目に岩手県盛岡市をリストアップしました。盛岡市は歌人・詩人の石川啄木（1886～1912）が生まれ育ち、花巻市出身の詩人・童話作家の宮沢賢治（1896～1933）が学んだ町でもあります。そんな盛岡の文学史跡を今号と次号に分けて紹介します。

岩手県日戸村（現：盛岡市）にある常光寺の住職の長男として生まれた啄木（本名：一）は、1歳の時に父の転住によって同じ岩手県渋民村（現：盛岡市）にある「宝徳寺」①へ転居しました。

近くにある「愛宕神社」②は、啄木が好んで散策しては詩作にふけた場所です。啄木は『渋民日記』で、社のあるこの森を「生命の森」と呼び、小説『雲は天才である』の中では、「春まだ浅く月若き生命の森の夜の香りに・・・」*1と描写しています。

宝徳寺に隣接した地に「石川啄木記念館」③があり、直筆書簡、ノート、日記などの遺品、写真パネル、映像等で啄木の生涯を紹介しています。記念館の敷地内には、1891年に啄木が入学し、4年間在校した「旧渋民尋常小学校」④が移築・復元され、明治初期の姿を今に伝えています。跡継ぎとして両親に溺愛されて育った啄木は、この小学校を主席で卒業し、盛岡高等小学校へと進学しました。その後1906年、21歳の啄木は家族の生活を支えるため、この母校で「日本一の代用教員」を自負して働き始めました。尋常科二年生を受け持ち、高等科の子供たちには課外授業で英語を教えていました。校舎の前の碑には、『悲しき玩具』に掲載されている“時として、あらん限りの声を出し、唱歌をうたふ子をほめてみる。”の歌が刻まれています。また、小学校の隣には、代用教員時代に、母と妻とともに一年間暮らした借家（「旧斎藤佐蔵氏宅」⑤）も移築・復元されています。ここの二階の一室から、同校を舞台にした処女小説『雲は天才である』などが生まれました。旧斎藤氏宅の前には、妻の節子が詠んだ“この舟は海に似る 瞳の君のせて白帆に紅の帆章したり”の歌碑が建っています。

記念館前から始まる「啄木ふるりの道」⑥と名付けられた小径を歩くと「渋民公園」にたどり着きます。この道の歩道には啄木の歌を刻んだ10枚の石板が埋め込まれています。

「渋民公園」には1922年に建てられた「啄木の



歌碑第1号」⑦があり、故郷を慕う短歌“やはらかに柳あをめる北上の岸邊目に見ゆ泣けとごとくに”が刻まれています。園内を流れる北上川に架かる「鶴飼橋」⑧は啄木がこよなく愛した吊り橋で、詩や小説の舞台としても登場します。現在の橋は後世に架け替えられたものですが、当時のイメージを活かして造られています。啄木は最寄り駅だった好摩駅や友人宅に向かう際にこの橋を渡っていました。

「好摩駅」⑨に掲げられている「こうま」の字は、啄木の文字から集字したものです。駅構内には啄木の全国でも珍しい木製の歌碑⑩“霧ふかき好摩の原の停車場の朝の蟲こそすずろなりけれ”が建っています。また、好摩駅前広場には“ふるさとの停車場路の川ばたの胡桃の下に小石拾えり”の「歌碑」⑪が建っています。好摩駅から徒歩10分ほどの場所にある「夜更の森」の入口には、“公園の木の間に小鳥あそべるをながめてしばし思ひけるかな”の歌碑⑫があります。

盛岡尋常中学校を中退した啄木は、1902年に好摩駅を出発して上京しました。しかし、名だたる文学者や雑誌社に自らの作品と面会を求める手紙を送ったものの、若干17歳の少年は全く相手にされず、わずか4カ月で失意のうちに故郷へと帰りました。

啄木ゆかりの渋民地区の玄関口である「渋民駅」⑬は、2019年4月に副駅名として「啄木のふるさと」と命名されました。啄木が居た頃はまだ渋民駅が無かったため、一つ先の好摩駅を利用していました。渋民駅の駅前にある小さな公園には、故郷と汽車を詠んでいる歌“なつかしき故郷にかへる思ひあり、久し振りにて汽車に乗りしに。”の歌碑⑭があります。渋民村を舞台に、あるひと夏の人々の交流を描いた小説『鳥影』^{ちやうえい}では、「淡い夜霧が田畑の上に動くともなく流れて・・・夏もまだ深からぬ夜の甘さが、草木の魂をとろかして、・・・北上川の水瀬の音が、そのシットリとした空気をふるわせる」^{※2}と渋民の自然が生き活きと描かれています。“かにかくに渋民村は恋しかりおもひでの山おもひでの川”と詠まれた美しい山と川に恵まれた故郷の情景は、啄木の原点として作品に反映されています。

次号では、盛岡駅周辺を巡りますので、お楽しみに。



※1『雲は天才である』石川啄木全集第3巻（筑摩書房・1978）
 ※2『鳥影』 同

どこからでも閲覧・複写ができる!

国立国会図書館

「個人向けデジタル化資料送信サービス」

対象資料

国立国会図書館デジタルコレクションで提供している資料約343万点のうち、絶版等の理由で入手困難なもの約184万点(2023年2月28日時点)

利用登録(無料)・ログインが必要

登録方法や条件は、国立国会図書館ウェブサイトをチェック!詳しい使い方も、ここで紹介しています。



https://www.ndl.go.jp/jp/use/digital_transmission/individuals_index.html

使い方

アクセス

パソコン、タブレット、スマートフォンなどから「国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/>)」にアクセス、ログイン。

検索

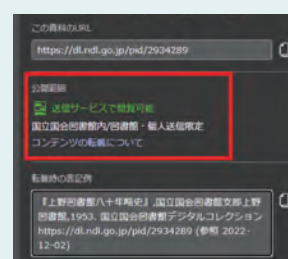
検索ボックスから、キーワード検索やカテゴリ検索で閲覧したい資料を探してください。一部の資料は、全文検索や画像検索も利用できます。

サービス対象資料には、「送信サービスで閲覧可能」の表示があります

検索結果表示画面

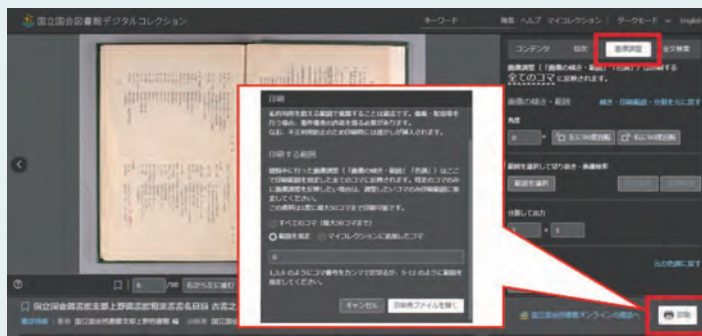


コンテンツ閲覧画面
(画面右側の「共有」欄)



複写

コンテンツ閲覧画面の右下にある「印刷」ボタンを選択すると、印刷ダイアログが開きます。印刷範囲を指定の上で、「印刷用ファイルを開く」を選択すると、PDFファイルが作成されます。



PDFは
保存・印刷
OK!

*PDFファイルの保存・印刷方法は、お使いのアプリケーションによって異なります。アプリケーションのヘルプでご確認ください。

*図はすべて「個人向けデジタル化資料送信サービス」(国立国会図書館)
(https://www.ndl.go.jp/jp/use/digital_transmission/individuals_index.html)より

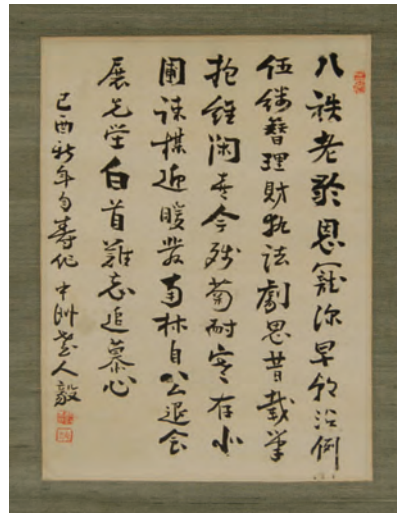
本学図書館では

個人で国立国会図書館の利用登録をしていない方でも、専用パソコンで「国立国会図書館デジタルコレクション」を閲覧できます。ただし、複写には申込用紙の記入と複写料金がが必要です。

本学所蔵資料紹介

三島中洲書幅 己酉元旦 明治四二年

三島中洲（一八三〇～一九一九）：本学創立者。明治十（一八七七）年八月大審院判事を退職、同年十月漢学塾「松学舎」を設立。明治二十九（一八九六）年東宮侍講、明治四十五（一九一〇）年大正天皇の侍講となる。大正四（一九一五）年宮中顧問官に任じられ、一等官に叙せられた。



八秩の老翁 恩寵深し
早朝例に沿ひて 櫻簪に伍す
財を理め法を執りて 勳むる昔を思ひ
筆を載せ経を抱きて 閑かなる今を喜ぶ
残菊 寒に耐へて 北圃に存し
疎梅 暖を迎へて 南林に発く
公より退食して 先瑩に展す
白首忘れ難し 追慕の心

八秩の老翁 恩寵深し
早朝例に沿ひて 櫻簪に伍す
財を理め法を執りて 勳むる昔を思ひ
筆を載せ経を抱きて 閑かなる今を喜ぶ
残菊 寒に耐へて 北圃に存し
疎梅 暖を迎へて 南林に発く
公より退食して 先瑩に展す
白首忘れ難し 追慕の心

八十の老齢になっても陛下（大正天皇）のご恩寵は依然として深く、朝早くからしきたりに従って、冠をつけた高位高官の人たちの列に加わる。経済をおさめたり法令を執行したりと務めた昔を思い出しては、文章を書いたり経書を読んだりする静かな今のくらしを喜んでいる。北の畑では咲き残った菊の花が、冬の寒さに耐えながらなおあり、南の林ではまばらな梅の枝が、春の暖かさで花を咲かせている。宮中から帰宅して祖先の墓にお参りをする。白髪頭の老人になっても、祖先を慕う気持ちは忘れずにいる。

（石川忠久編『三島中洲詩全釈』第四巻より）

作家のおやつ巡り⑥

江戸時代末期創業の老舗「言問団子」は、平安時代前期の歌人である在原業平（825～880）が東国を旅した時に読んだと伝えられる有名な和歌“名にしおはばいざ言問はん都鳥我が思ふ人はありやしやと”にちなんで命名されました。店名を冠した名物の「言問団子」は、小豆餡と白餡、みそ餡の3種類の味が楽しめます。

画家で詩人の竹久夢二（1884～1934）は、日記の中で「ことゝひのおだんごがとにかくおいしい。」*と絶賛しています。夢二の他に、近所に住んでいて手紙のやり取りがあった幸田露伴（1867～1947）や永井荷風（1879～1959）もこの店のファンだったようです。

天気がよければ、隅田川を眺めながら食べるのもおすすめです。

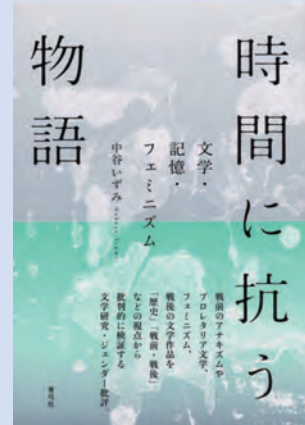
*大正4年4月8日『夢二日記1』筑摩書房 1987年刊



本学教職員著書紹介

『時間に抗う物語 —文学・記憶・フェミニズム—』

中谷いずみ 著
(青弓社、2023年2月24日刊行)
A5判 262頁・2,600円+税
ISBN：978-4-7872-9273-5



本書は、日本近現代文学や文化が現実の暴力をどのように捉え、描いてきたかに着目し論じたものである。主に1920年代以降の社会変革を求める人びとへの公権力による弾圧や戦時の強制労働、原爆被害などの歴史的暴力に関わるテキストを取り上げ、階級やジェンダー、記憶の編成といった観点から文学・文化の政治性について考察を試みている。

序章「時間に／で介入する」で取り上げた津村記久子の小説『君は永遠にそいつらより若い』（筑摩書房、2005年）には、「負けるのには慣れてるんだ！」と主人公が子どもの頃に受けた暴力を語り、それを聞いた者が「そこにおれんかったことが、悔しいわ」と呟く場面がある。ここに示されているように、のちの時間を生きる者は暴力が行使された時点に間に合わない。しかし間に合わないからといって関与できないわけではない。暴力の爪痕は長い時間的射程をもつものであり、また暴力を可能にする諸要因が温存されたままだとすれば、それが発動された時点から現在までの時差を介入の余地とみなしてそこに関わっていくこともできるのではないだろうか。

このような考えのもと、第一部では公権力による弾圧の対象となった戦前のアナキズムやプロレタリア運動の女性たちに注目した。自らの意志で運動に身を投じた彼女たちが性役割を担わされ、運動から疎外かつ搾取されてしまったさまを、当時の女性の書きものや小説などから明らかにした。第二部と終章では、1945年以降に書かれた戦争や原爆を題材とする小説や戯曲をとりあげ、「戦前」「戦時」がどのように描かれたか、それらが「戦後」の地政学的動向や集合的記憶の編成にどのように関わるものだったのかを、家父長制や異性愛主義、植民地主義などの観点を組み込みながら論じた。

暴力を可能にした要因や認識論的枠組みを文学や文化の場から明らかにすることで、時間に／で介入すること。『時間に抗う物語』という書名には、このような思いが込められている。手に取ってもらえれば幸いである。

文学部国文学科 教授 中谷いずみ

編集後記

「季報」116号をお届けします。
今号では、2名の教員の図書館や本にまつわる思い出を紹介させていただきました。
本棚を気の向くままに眺めることも、インターネットでブラウザ越しに情報を探することも、どちらも「ブラウジング」と呼びますね。本学図書館では、紙の本もデータベースなどのデジタル資料も多く揃えています。研究活動の合間に、思いがけない情報との出会いもお楽しみください。(Sh)

二松学舎大学附属図書館
季報
第116号

発行日 2023年7月15日
発行 二松学舎大学附属図書館
九段図書館 〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16
電話：03-3263-6364
柏図書館 〒277-8585 千葉県柏市大井2590
電話：04-7191-8758
印刷所 株式会社 サンセイ